三重大学教育学部研究紀要　第71巻　教育科学（2020）283－289頁

保護者間関係形成の今日的な意義と課題

－自発的ネットワーク形成事例の検討－

大日方　真史*

Significance and Issues of Relationships among Parents
－ a Case of Spontaneous Network Formation －

Masafumi OBINATA*

要　旨

近年、保護者の有する社会的なネットワークの重要性が指摘されてきている。そのなかでも、本稿では、保護者間の関係に特に重要な意義があると捉え、保護者間におけるネットワークに焦点をあてる。本稿において追求するのは、保護者たちが、公的な性質を有するネットワークを、自発的に形成していくことの今日的な意義と課題である。

公的な性質を有するネットワークに着目するのは、保護者間の私的な関係においては、疎外・排除や抑圧の問題を回避しきれない恐れがあるという理由からである。

公的な性質を有するネットワーク形成のために、学校からの働きかけに公的な機能を期待することは、重要な選択肢になりえよう。しかし、保護者が有する社会的なネットワークが、当の保護者の学校関与に既に影響を及ぼしていることを示す先行研究もあり、学校が主体となる保護者間関係形成の取り組みだけに期待するのでは、十分ではない可能性がある。これが、本稿において、保護者たちによる自発的なネットワーク形成に着目する理由である。

本稿における追求は、小学生の子どもをもつある保護者を対象に筆者が実施したインタビュー調査で得られたデータの分析をもとに進められる。当該保護者は、保護者間のネットワーク形成を構想し、形成に向けた活動を進めていった経験を有する。本稿では、その形成に向けた段階、そして、実際にネットワークが形成された後の段階に、それぞれ実施したインタビュー調査のデータを用いる。

キーワード：社会関係資本、学校関与、公的、PTA

はじめに

保護者にとって子育てと教育が、社会的なつながりのなかでなされることには、重要な意義がある。教育の私事化状況にあり、保護者が孤立する危険をはらむ今日において、この点は強調されるべきであろう。特に、保護者にとっての親族以外のネットワークの重要性について確認する必要がある。例えば、「ポスト育児期（子どもが小学生以降の子育て期）」の母親に着目して荒牧（2019:135）が明らかにした、その時期においては、「子どもの教育環境をどのようにコーディネイトするべきかの相談相手として、非親族ネットワークの重要性が高まっていく」といったような点である。

加えて、保護者の有する社会的なネットワーク（これを「社会関係資本」あるいは「ソーシャル・キャピタル」と呼ぶこともできる）に関しては、このように保護者自身が子育てと教育を担ううえで直接に重要であるという点だけではなく、さらに次の 2 点において、学校教育の成否に影響することも指摘されてきている。

第 1 に、保護者の有するネットワークが、当の保護者の学校関与に影響する点である。城内・藤田（2011）は、保護者の階層の影響とは独立して、「社会関係資本を持っている保護者は、学校を支援していく活動を活発に行」うことを明らかにしている。学校に保護者が関わる機会が用意され活かされることは、保護者にとっても学校にとっても意義があるが、保護者の学校関与の程度が当の保護者の有する社会関係資本によって影響を受けるというのであれば、保護者がいかなる社

＊三重大学教育学部

会的なネットワークのなかにあるかに着目せねばなるまい。

第 2 に、保護者の有するネットワークが、その子どもの学力に影響する点である。志水ほか (2012) は、「つながり格差」という概念を用いつつ、子どもの社会関係資本は保護者の社会関係資本との関連性が強いことと、今日においては、経済資本・文化資本だけでなく、社会関係資本が子どもの学力形成に影響することとを明らかにしている。社会関係資本における格差（「つながり格差」）が、学力形成に否定的な影響を与えると指摘するのである。そして、「経済資本・文化資本に恵まれない子どもたちにとって、家族や仲間、地域の人々との豊かなつながりは「学力のセーフティ・ネット」を構成すると言ってよい」という。

上の 2 点をこのように確認してくると、格差に焦点化した学力形成の問題か、階層の影響とは独立した保護者の学校関与の問題か、という焦点の相違はあるにせよ、保護者を対象にして、社会的なネットワークの形成を促す・保障する方策を探ることが課題になりうるといえよう。

この課題は、志水ほか（2012:84）によれば、「個々の家庭の動向に基本的には委ねられるべき経済資本・文化資本と異なり、社会関係資本は、よりパブリックな側面を有している。あるいは、社会的に介入可能な側面をもっている」ため、「「低学力層」を救うためには、社会関係資本＝つながりの再生・再構築という戦略がもっとも有効、かつ不可欠」だということになる。具体的には、志水ほか（2012:84）は、「教師と子どもの信頼関係や子どもの集団づくり、保護者や地域住民の学校参加や地域教育活動、保護者の子育てネットワークづくりなど」の意義を指摘している。

また、前述の研究結果をふまえ城内・藤田 (2011:96) が指摘するのは、「学校は、保護者の社会ネットワークを豊かにするような環境づくりが求められる」ということである。

これらの提言に見られるように、確かに、社会関係資本の「パブリックな側面」に着目して「社会的に介入」することや、学校による「環境づくり」は、公教育としての学校が引き受ける価値のある課題だといえよう。社会関係から疎外される保護者を生み出さないための公的なアプローチを試みるうえで、学校は重要な機関になるはずである。

ところで、保護者のもちうる社会的なネットワークとしては様々な関係を想定しうるが、なかでも着目を避けられないのは、保護者間のネットワークである。保護者間の関係は、子育てと教育の当事者同士として、それ以外とは異なる特殊な関係であるとともに、そのネットワークを構成する主体全員にとって前述のような肯定的な影響を期待できることになるはずだからである。つまり、保護者間の関係は、保護者の有しうるネットワークのうちで、特に重要度が高いと考えられるのである。

学校との関係のなかで、保護者間のネットワーク形成を促すうえで重要な候補になるのは、PTA であろう。実際に、PTA 活動を通じた「保護者同士のソーシャル・キャピタル醸成」の可能性や（稲木ほか 2017）、「他者と関わりながら活動を行い、関係性からの満足や喜びを認識できるときに」、すなわち「人間関係の広がり」を得られるときに、さらなる PTA 活動への参加意向につながる可能性（中山 2016）が明らかにされてきている。

しかし、PTA をめぐっては、近年、役員選出にまつわるトラブルなど、むしろ保護者間での関係悪化を招きかねないような事態が盛んに指摘されてきている。こうした流れの中で、個々の保護者が PTA に加入しない方向性が示されたり、PTA 不要論（例えば、黒川 2018）が議論されたりしてきている。ただし、PTA に加入しないという選択も、PTA を不要だという議論も、それだけでは保護者間の関係形成に寄与する方向性を示すものにはなりえないはずであるから、保護者間の関係形成の問題としては、別立ての議論を要することになろう。

ここで改めて、城内・藤田（2011）が明らかにしていたように、そもそも学校関与には、保護者の有する社会的なネットワークが影響するという点を確認したい。そうすると、学校が直接の主体となって働きかける「保護者の社会ネットワークを豊かにするような環境づくり」だけではなく、学校が前面に出ずに、保護者たち自身が主体的にネットワークを形成していくような可能性を追求しておく必要があるのではなかろうか、という考えに至る。保護者間において、既に学校関与の程度に差がある状況にあるとするならば、学校からの働きかけにのみ期待するのではなく、保護者たち自身が関係をつなぐ可能性を検討することに意義があるかもしれないということである。

この点をふまえ、本稿で追求するのは、保護者たちが自発的な活動として、保護者間ネットワークを形成することの今日的な意義と課題である。その際、今日、既に各所に見られるような、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）等も利用して形成される保護者間の私的なグループとは一定程度区別される、より公的 [1] な性質をもつネットワークに焦点をあてることにしたい。私的なグループでは、そもそもそこに加われない保護者が存在するなどのメンバーシップにおける疎外・排除の問題や、内部の関係における抑圧の問題などを回避しきれないためである。社会関係資本の

「よりパブリック側面」を重視する意味でも、保護者間の関係のうちで、特に、より公的な性質をもつものはいかに形成されうるかということを追求するのである。

1. 対象と方法

本稿における追求は、大都市圏に居住し、地域の公立小学校に通う子どもをもつ一人の保護者（母親。以下、仮名で、大森さん、とする）を対象に、筆者が実施したインタビュー調査のデータの分析を通じてなされる。大森さんに対するインタビューは、①2017 年 9 月に約 90 分間、②2017 年 12 月に約 90 分間、③2018 年 10 月に約 60 分間、実施した。インタビューは、当初、大森さんから保護者としての学校との関わりについて聴くものとして展開されたが、その過程で、保護者間のネットワークをつくりたいと考えているという大森さんの意思が聴かれた。その意思とは、悩みを打ち明けられるような関係の保護者がいないという大森さんに、当時の担任教師が、保護者同士で話し合う場を設けてはどうかと伝えたことを契機として抱かれたものであり、保護者たちが懇談できる場が欲しいというものであった。この大森さんの抱いている意思が確認されたため、それに関わる内容について、インタビュー②では特に焦点をあて、実際にネットワーク形成を試みる過程で大森さんがいかなる事柄に遭遇していたのかを聴くことにした。インタビュー②では、後に紹介するように、大森さんの構想しているネットワークが、公的な性質を有するものであることが確認された。

その後、2018 年 4 月に、下記のような E メールが大森さんから筆者宛てに届き（当該 E メールの内容の本稿における引用について大森さんの了承を得た）、ネットワーク形成が実際に進展していることが確認された（以下、大森さんが中心となって設立したネットワークを、仮に、M ネット、とする）。

> 昨年度から、地味に動いている、子育てネットワークですが、「M ネット」という団体名も決まり、地域の市民ホールにも登録して、無料で場所を確保できるまでこぎつけました（略）学校全員の保護者に案内を配布して、第 1 回目を開始する予定です。どれだけニーズがあるか、どれだけ集まるかはわかりませんが、とりあえずはこの一年の活動を目安にやってみたいなと思っています。

その後、M ネットが開催する会が 3 回開かれた後に実施されたのが、インタビュー③である。

なお、インタビュー調査に際しては、事前に、対象者である大森さんに対して、研究に関する説明と拒否・中断が可能であることの説明を行い、大森さんから、録音の許可とあわせ、調査協力の了承を得た。また、論文化にあたっての内容確認の機会を対象者である大森さんに保障した。

以下、大森さんに対するインタビューを録音した音声データから作成したトランスクリプトをもとに分析していく。まず、2 で、ネットワーク形成の過程において大森さんに見出された意義や課題は何か（インタビュー②より）、続けて、3 で、実際に M ネットがいかに動き出しているか（インタビュー③より）に、順に焦点をあてて確認していくことにする。

2. ネットワークの形成過程

(1) 出会いとつながり

実際に動き出すはじめとして、大森さんは、互いの子どもが通う「学童でおんなじ」、「ちょっと話したこともある」、ある母親（以下、A さん、とする）に声をかけ、ネットワークづくりについての自身の考えを伝えたという。

その際のやりとりについて次のようにいう。

> しゃべってったら、「すごい興味がある」みたいになって。で、ほかのお母さんにも、そのお母さんが、声をかけてくれたんですけど。（略）たまたま、そのお母さんも、すごい、やっぱり、悩んでて。悩んでるっていうか、〔A さんのお子さんは：筆者補足〕支援級に行ってた子どもさんで。知らなかったんですけど。そのお母さんも、〔わが子が：筆者補足〕支援級に行ってるから、声かける方は、〔その方の子が：筆者補足〕通級だったり、支援級だったりっていう、お母さん。

大森さんは、ネットワークをつくろうという考えを A さんと話してみて、はじめて、A さんの子どもが「支援級」（特別支援学級）に通っていることを知ったという。また、A さんから、ネットワークづくりへの興味も聴きとったという。

大森さんがはじめに声をかけた A さんが、さらにほかの保護者にも声をかけた結果、大森さんは、また別の母親（以下、B さん、とする）と出会うことになる。

その B さんについて、大森さんは次のようにいう。

> で、その流れで、あるお母さんが、すごい興味をもってくれて。そのお母さん、発達支援の親の会を設立した、お母さんだったんですけど（略）

で、「その子育ての会をつくるっていうのは、すごい興味がある」っていってくれて。(略)「いくらでも手伝うけど」みたいなかんじで。

学童ではね、知ってたんですよ。でも、ぜんぜん、団体をつくったとかっていうのは、知らなくって。そういう話ができたときに、「ちょっと、お茶しようよ」ってなって。二人で、はじめて、お茶して。自分のことも話して。

大森さんは、B さんもまた、大森さんの構想するネットワーク（「子育ての会」）づくりに興味をもってくれたという。また、B さんが「発達支援の親の会」を設立しており、大森さんは B さんの存在は子どもが通う学童を通じて知っていたものの、B さんの有するその経験については知らなかったという。大森さんと B さんとは、「お茶」をする機会ももたれ、話を交わしている。

このように、大森さんの声かけを契機に、A さん、B さんへと関係が少しずつ広がっていき、大森さんが次のようにいう、SNS（LINE）を用いたグループが成立する。

グループ LINE できてるんですよ。そこで。そのお母さん〔B さん : 筆者補足〕と、わたしと、あと、最初に声かけをしたお母さん〔A さん : 筆者補足〕と、そのお母さんが紹介したお母さん、5 人で、グループ LINE はできちゃってるんですけど。だから、つながりはできちゃってるので。おもしろいもんですよね。

こうした関係がネットワークづくりの過程で形成されていっていること自体が、「おもしろいもんですよね」というように、大森さんにとって肯定的な経験になっているようである。

それは、次のようにいう大森さんの言葉からも確認できる。

わたしもはじめてつながったお母さんもいて。すごい、わたしとしては、ラッキーっていうか。

（2）意義の実感

大森さんは、ネットワークづくりの過程で、上記のような関係の広がりを実感するとともに、ネットワークを求める声にも触れ、活動の意義を実感していくことになる。

まず、直接大森さん自身が聴いた声については、次のようにいう。

ひとり、すごく楽しみにしてくれてたお母さんがいて。(略) そのお母さん、「すごい、話する場が欲しかった」っていってたんですね。だから、そういうお母さんもいるって思ったら、やっぱりニーズってすごいあるんだろうなって、思って。

大森さんは、「話する場」への期待が保護者のうちに実際にあることを確かめている。

また、B さんとの会話で大森さんが聴いたこと、そして感じたことについて、大森さんは、次のようにいう。

そのお母さん〔B さん : 筆者補足〕、(略) 知り合ったお母さんたちと、話をしてたときに、すごくやっぱり、ほっとしたんですって。こういう、話をする場が今までなかったから、すごい、それで必要だと思ったんだと思います。「お母さんたちにもちゃんとガス抜きしてもらわないとね」って。「そうですよねえ」って。うまいこと、だれか、お友だちがいて、ランチとかできるお母さんとかはね、うまくガス抜きできるんだろうけど。こう、同じ悩みをもってるお母さんと話をするって、それはやっぱり、おおきいですよね。「うちの子も、こうなの」っていうことを、いえる場があったらいいんだろうなって、思ってる。

「話をする場」があって得られた「ほっとした」という感覚と、そうした場がなかなか得られないという事実から、B さんは、そうした場を必要だと考えるようになったのではないかと、大森さんはいう。このやりとりのなかで、大森さんにとっても、互いに話せる場の必要性がより実感されることになったといえよう。

（3）課題―公的な性質をいかに求めるか

形成しようとしているネットワークを私的な性質の関係にとどめず、公的な性質をもつものにいかにできるのか。この点が、形成過程で課題にされていたことが、大森さんが B さんとの会話を紹介しながら、次のようにいう内容に確認できる。

そのお母さん〔B さん : 筆者補足〕とも、話してたんですけど。誰でもきていいよっていうような雰囲気を、もちろん、つくっておいて。でも、やっぱり、発達に悩んでるお母さんっていうのと、ほんとにふつうに子育てに悩んでるお母さんとの悩み感とか困り感とかって、すごいやっ

ぱり差があるんじゃないかなって。(略) だから、そこらへんですごい、難しくはあるかなって。(略) 誰でもきていいっていえる体制を、やっぱりつくっておかないと、いけないねっていう話を、してたんですけどね。

大森さんの A さんへの声かけからはじまったネットワークづくりであるということにも由来するであろうが、「発達に悩んでる」保護者と、そうではない保護者との悩みやニーズの相違を想定し、そこに焦点化した課題が浮上している。

この課題（「だれでもきていいっていえる体制」をつくっておく）に対して、実際にどのような仕方でアプローチされたのかは、次の 3 で示すことにする。

(4) 課題—準備に向かう担い手の構え

以上のようなネットワークの性質をめぐる課題に加え、大森さんにとっては、時間と会場の調整・確保、「人集め」などといった準備に由来する躊躇や悩みがあったという。それらを受け止める自身の構えについて、大森さんは、次のように語っている。

わたしがね、すべて振り切って、よっしゃーと思って、できるんだったら、もう、突き進んでいけるんでしょうけどね。(略) わたしが、けっこう、どうしたらいいものか、だんだんわからなくなってきて。ぱっぱっぱっと、いかないもんですね。こういうのって。

ネットワーク形成に向けて動き出し、その過程で出会いの機会を得て関係が広がったり、ネットワークへの期待を受け取ったりしているが、実際の作業を進めるうえでは、様々な困難にも遭遇していることがわかる。

3. 動き出したネットワーク

(1) 概要

2018 年度にはじめられた、M ネットが開催する会がいかなるものであるか、大森さんの話をもとに簡単に確認していく。

大森さんは、M ネットが開く会について、「こじんまりとっていうか、人数、そんなにあれですけど。楽しくやってます」という。

また、大森さんは、M ネットを運営するのは大森さんを含む 5 人であり、その 5 人の間では下記のような役割分担があるという。

5 人のメンバーが LINE をつくってて、そこで一応、役割を決めていて。代表と、広報担当 (略)、メールにきた返事をする担当と、当日の、会場設営、ですかね。会場とったりとかするのは、わたしが、やってるんですけど。

2 で前述した、ネットワークづくりの過程で形成されてきた関係は、そのまま運営を担うメンバーとなっているということである。

会の参加者であるが、大森さんによれば、第 3 回まで、各回には、運営メンバー5 名を含め、5 名から 20 名弱の参加があった。

各回、運営メンバーで事前に「そのときにあったかんじのテーマ」を設定し、「座談会みたいなかんじ」の形態や、専門家を招く形態で開催しているという。

(2) 広報を通じた公的性質の追求

一般的な保護者間の私的関係とは異なる、M ネットの公的な性質、2 で確認した「だれでもきていいっていえる体制」の確保は、広報によって試みられているといえる。

大森さんは、M ネット第 1 回の会のチラシ配布許可を求めてわが子が通う小学校の校長と交渉したという。それについて次のようにいう。

「もう、1 回だけでいいので」って、配布の許可を交渉して。で、全校のお母さん方に、1 回、渡して。

次の第 2 回については、次のように、口コミであったという。

次の広報をどうするかってなって。とりあえず、いろんなネットワークを使って、広報しようっていって。お母さんたちで、口コミでなんとかやって。

第 3 回については、次のように、再び、校長との交渉を試み、学校に掲示するようにしたという。

もう 1 回ね、校長先生にお願いしたんですよ。(略)「配ってもいいですか」って、聞いたんですけど。却下されて。(略)「じゃあ、掲示板に、貼るのはいいですか」っていって。学校の掲示板に貼らしてもらって。

第 3 回については、学校の掲示板のほか、次のような広報手段をとったという。

あと、各マンションのところに、きいてもらったりとか。あと、使う市民ホールの前の広報と。わたしが、学童のメンバーなので、お願いして、「保護者会のときチラシ配らしてください」みたいなかんじで。あとは、もう、知ってるお母さんに、LINE みたいなかんじで。きてくれる人がいたらいいねっていって。〔メッセージを：筆者補足〕送ったんですけど。

以上のように、学校（校長）に対しては、広報に関わる要望を寄せ、交渉を通じてチラシの全家庭配布や、掲示板への掲示を実現していったという。また、様々なルートを通じた広報も試みられたという。このようにして、公的な性質をもつネットワークとして成立させようとしているといえる。

（3）今後の見通しと迷い

名実ともにMネットの発起人であり、運営の中心を担っている大森さんは、こうして動き出しているMネットについて、どのように今後の見通しを抱いているのであろうか。

大森さんは、次のようにいう。

来年度ね、どうするかなと思って。それもちょっと、考えてるんですけどね。たぶん、みんな、お母さんたち、「やりたい」っていうのかなと思いながら。どうしようかな。私自身がいっぱいいっぱいで、迷いがあって。そうなんですよ。（略）ちょっと、忙しいなって。（略）すごいゆらいでるんですよ。私自身が。まあ、でも、「とりあえず 1 年やってみよう」っていわれて。なんか、この勢いでやりそうなかんじもしますけどね。

おそらく、インタビューでは語られない部分を含め、担い手としての大森さんの負担には相当なものがあるということであろう。しかし、動き出した活動の力を見て、続いていく見通しを得てもいるということのようである。

おわりに

保護者がいかなる社会関係資本を有するかは特に今日において課題となっており、保護者間にネットワークが形成されることには重要な意義がある。この意義を保護者たちに広く十分に実現するには、特定の保護者の排除や孤立を避けるということが、その保護者間ネットワークの特性である必要がある。つまり、公的な性質をもつ保護者間ネットワークの形成が重要な課題である。

そのような前提にもとづき、実際にいかなる仕方でネットワークがつくられうるかを追求しようとすると、個別的な状況のなかで、その状況にふさわしい諸条件を探るということになろう。

本稿で取り上げた保護者たちが自発的にネットワークを形成していく事例もまた、当然ながら、個別的な状況を反映したものである。

例えば、M ネットの運営メンバーには、大森さんの A さんへの声かけにはじまる M ネット設立に向けた活動の経緯から、子どもの発達に関する悩みを抱えやすい保護者たちが複数入っていた。これは、そのメンバーたちにおける、そうした悩みを共有する機会に容易にはめぐりあえないという経験や、それも背景にした、語りあえる場の価値に対する実感が、M ネットの方向性に影響していることを示唆している。

また、関連して、M ネットの運営メンバーには、既に「発達支援の親の会」をつくって活動している保護者（B さん）が加わっていた。この B さんの活動の経験が M ネット設立前後の活動に生かされていることも十分に推察されることである。

さらには、大森さんがはじめに声をかけた A さんも、そこからさらにつながっていった B さんも、大森さんとは、それぞれの子どもが通う同じ学童クラブの活動を通じて顔見知りであったということも、本事例においては、重要な条件であったと考えられる。

このような個別の状況とそこに備わっていた固有の条件に鑑みれば、保護者間関係形成の今日的な特徴を本稿で取り上げた一事例のみから一般化して指摘することには、慎重でなければならない。

それでも、本事例の分析を通じて明らかになった次の点に関しては、今日における保護者間関係形成に関する意義とそれに伴って見出されうる課題として、指摘してよかろう。

第 1 に、保護者間関係形成にまつわる事柄として、それぞれの保護者の有する困難や悩みに着目することの意義である。本稿では、保護者の抱える悩みがネットワークに対するニーズにつながっており、そのニーズの所在が、まさにネットワークを形成しようという動きのなかで掘り起こされ、互いに確認しあわれていったという過程を示した。個人的な次元にとどめられていた悩みは、共有される場を求めていたのである。社会関係資本は、保護者の学校関与のためにも、子どもの学力形成のためにも重要な機能を果たしうるのであろうが、困難や悩みを保持しつつ子育てや教育に取り組むことになる当の保護者の主観的な意味において、保護者間関係には、やはり相応の重みがありうること

を確認してよかろう。

第 2 に、保護者間に関係を形成するうえでの、公的な性質の意義である。M ネットは、形成過程において目指されていた方向性としても、実際の広報活動においても、公的な性質を有するようにつくられ、運営されてきているといえる。

このことには、まず、私的な関係から疎外される保護者の存在を減らす方向でなされているという点に意義があろう。「だれでもきていい」場は、排除されやすい状況にある保護者にとって、とりわけ重要であろう。

また、公的な性質をもつネットワーク形成を目指していたということ自体が、のちに M ネットの運営メンバーになる保護者たちの間の関係形成を促していた側面があるともいえそうである。つまり、大森さんが A さんに最初の声かけをした段階では、大森さんと A さんとの間には、私的で親密な関係があったわけではないが、それゆえにこそ、公的な性質を有するネットワークを新たにつくることをめぐって対話が生成し関係が形成されたといえるのではなかろうか。公的な性質をもつネットワークを生み出そうとする活動自体のなかに、それを通じて保護者たちが語り合う関係が生まれる契機・可能性もまた、含まれているのかもしれない。

第 3 に、学校の関与が課題となることである。公的な性質を保持するためには、例えば、M ネットにとっては学校を通じた広報が交渉によって可能とされていたように、学校も介した活動の展開がいかになしうるかは課題になりうるであろう。学校が主体となって直接に保護者間の関係づくりに取り組むのではなくとも、学校の関与の仕方は、保護者たちのニーズに応じてさまざまになされるように検討される必要があるのではなかろうか。

第 4 に、大森さんがネットワーク形成過程で困難に遭遇し、実際に会が開かれてからもその後の見通しに一定の葛藤や不安を感じていたように、担い手には相応の負担があり、それに対する対応を検討することが課題であろう。これは、保護者間に私的な関係を形成・維持するのとは別種の、公的な性質をもつネットワークゆえの負担であると考えられる。こうした担い手の負担の緩和策を検討することが、公的な性質をもつ保護者間ネットワークを、特殊な条件下でのみ成立しうるものではなく、より広く、より継続的に展開させうるものにしていくことにつながると考えられる。

最後に、残された課題を指摘しておく。

本稿で取り上げた事例の他にも、保護者間関係形成の様々な試みが存在するはずであるから、それらを対象に、例えば、公的な性質はいかに位置づけられるか、学校や PTA との間にいかなる関連を有するかなどを探ることが課題になる。

また、保護者間のネットワークを立ち上げて中心的に運営する保護者たちだけではなく、形成されたネットワークに会の参加者として関わるような保護者たちを対象に含め、それぞれの保護者において、保護者間のネットワークに対するいかなる関与や意識があるのかを追求することも、課題になろう。

注

1）本稿では「公的」という語を、主として、「公共性」という言葉の意味を齋藤（2000:viii-ix）が、①国家に関係する公的な（official）もの、②すべての人びとに関係する共通のもの（common）、③誰に対しても開かれている（open）、と大別するうち、③に近い意味で用いることにする。

引用・参考文献

荒牧草平 2019『教育格差のかくれた背景―親のパーソナルネットワークと学歴志向』勁草書房

稲木隆一・上田菜央・扇原淳 2017「PTA 活動が保護者のソーシャル・キャピタル醸成に及ぼす影響―複線径路・等至性モデルによる分析」『家庭教育研究』22 号

黒川祥子 2018『PTA 不要論』新潮社

齋藤純一 2000『公共性』岩波書店

志水宏吉・中村瑛仁・知念渉 2012「学力と社会関係資本―「つながり格差」について」志水宏吉・高田一宏編著『学力政策の比較社会学【国内編】―全国学力テストは都道府県に何をもたらしたか』明石書店

城内君枝・藤田武志 2011「階層と社会関係資本が保護者の学校参加に及ぼす影響―S 小学校の事例調査を通して」『学校教育研究』26 巻

中山満子 2016「PTA 活動経験が向社会活動への参加意向に及ぼす影響」『対人社会心理学研究』16 号

付　記

本論文は、科学研究費補助金（若手研究（B）「学校参加の条件となる保護者意識の形成過程に関する研究」(課題番号 17K13979)）の成果の一部である。